平成18年度 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科

法曹実務専攻（法科大学院）

法学既修者認定試験問題

入学試験（Ｂ日程）第２次選抜（論述試験）問題

（問題は共通です）

民　法

配点　１００点

時間　１８０分

※ 試験開始の合図があるまで、

この問題冊子の中を見ないこと。

問題　１　　（配点２５点）

ある日、Ｘは、弁護士と称するＹから電話を受けた。Ｙは、Ｘの息子が交通事故を起こし、自分はその事故処理にあたっていること、被害状況からみて少なくとも50万円の示談金が必要である旨を告げた。Ｙの言を信じたＸは、「事故処理の方、よろしくお願いします。50万円はすぐに振り込みます。」といい、Ｙに指定されたＺ銀行のＹ名義の口座に50万円を振り込んだ。

その後、Ｘは、息子から別件で電話を受け、Ｙから告げられた交通事故の話は、まったく架空の話であったことを知った。

ＹがＸからの振込金を未だ引き出していないとして、以下の設問に答えなさい。

（１）　Ｘは、Ｙに対して、いかなる請求ができるか。

（２）　Ｘは、Ｚに対して、いかなる請求ができるか。

問題２　　（配点２５点）

Ａは土地甲を所有していた。2005 年 4 月 1 日に、Ｙは駐車場を経営する目的で、Ａから土地甲を賃料月額 7 万円、期間 5 年の約定で賃借した。賃借権の登記は未了であった。同年 5 月 1 日にＡはＸに土地甲を 1000 万円で売却した。しかし、Ｘは代金を 800 万円しか支払っていなかったため、2005 年 7 月 1 日の段階で、移転登記は未了であった。

（1）2005 年 7 月 1 日に、ＸはＹに対して所有権に基づいて土地甲の明渡を求めた。この請求は認められるか。

（2）2005 年 8 月 1 日に、ＸはＡに土地甲を賃貸するという条件で、残代金 200 万円を免除してもらい、移転登記を完了した。この賃貸借契約の内容は、賃料月額 3 万円、期間 5 年というものであった。ＸはＹに対してどのような請求が可能か。

問題 3　　（配点 25 点）

温泉町の旅館を経営するAは、以前から取引関係にあるB信用金庫のため、自己所有の甲不動産上に極度額5600万円の根抵当権を設定していた。ここのところ、Aの旅館は営業不振の状態が続いており、甲不動産上の根抵当権によって担保されるBのAへの融資額は、ほとんどその極度額に達しようとしている。また、Aは、B以外の債権者に対しても多額の債務を負っているのが実情である。これらの負債総額は、Bからの債務を含めて3億円を下らないのに対し、Aのめぼしい資産といえば、すでにBの根抵当権が設定されている甲不動産と、Aが郊外に所有する乙不動産のほかはなく、旅館業に付随する什器等を加えても1億円程度の評価額と見られる。

（1）甲不動産上の根抵当権の実行としてBが競売を申し立てようとしたため、Aは、甲不動産を5500万円でCに買い受けてもらい、その代価をもってBに対する債務の弁済に当てることとし、AからCへの移転登記とともにBの根抵当権設定登記が抹消されたものとする。無担保の一般債権者Dは、この売却処分を詐害行為として取り消すことができるか。

（2）（1）とは異なり、Aが、もともと無担保の一般債権者であったEのため、新たに乙不動産上に抵当権を設定したものとする。この行為につき、同じ無担保の債権者であるDは、詐害行為取消権を行使することができるか。

（3）（2）において、仮にDの請求が認められた場合を想定するならば、Aの財産保存のために訴訟費用を支出し、共益費用の一般先取特権を有するDは、抵当権者Bに対しても優先権を主張することができるか。

問題４　　（配点 25 点）

2005 年 10 月に死亡した A には、相続人として配偶者 B と子 CD がいる。A は、生前の同年 1 月に現金 2000 万円を P に贈与しており、さらに、残った遺産 8000 万円から、Q に対して 4000 万円の不動産(本件不動産という)を遺贈していた。なお、A の債務額は 2000 万円である。下記の設問に答えなさい。

（1）　BCD は、誰に対して、どのような請求ができるか。その根拠も含めて具体的に論じなさい。

（2）　Q は、BCD からその請求を受ける前に、本件不動産を R に譲渡し、移転登記も経由した。BCD は、誰に対して、どのような請求ができるか。また、Q から R への譲渡が、BCD からの各請求の後であった場合について、BCD と R との法律関係について論じなさい。なお、本件不動産の価格は変化していないものとする。